

「自己とは何か」は、哲学にとって古典的なビッグイシューであるとともに、脳神経科学の進展等を踏まえ、現代哲学においてもホットな話題となっている。

現代の自己論の一つの特徴の一つは、デカルト・カント・ヘーゲルタイプの、世界とその意味を支える実体ないし根源的なエージェントという「強い」自己に対するオルタナティブとしての「弱い」自己像が、多様なコンテクストの中で提案されてきたことにある。例えば、デレク・パーフィットの断片的な自己観、ケネス・ガーゲンに関する社会構成主義、アルネ・ネスのエコロジカルセルフ等々、様々な「弱い自己」が議論の的となってきたのである。

自己を巡る現代哲学のもう一つの特徴は、非西洋の哲学思想との対話の機運の高まりである。パーフィットの自己観と仏教哲学との関連はつとに指摘されてきたが、それ以外にも、例えば仏教思想や老荘思想等のアジア思想をバックグラウンドとして、様々な自己論が提起されてきた。その代表例の一つが、アビダルマ仏教思想を背景とする、マーク・シデリッツによる「自己に関するフィクション説」である。

このような状況を踏まえ、本年のインターナショナルセッションは、非西洋の哲学伝統をも視野に入れた形で、自己に関する現代哲学の最前線の一端を示すことを目指して企画された。具体的には、現代自己論のメインプレイヤーの一人であるマーク・シデリッツ氏(ソウル大名誉教授)を迎えた上で、ヒュームやウィリアム・ジェームズの自己論の専門家である犬飼由美子氏(マサチューセッツ大学ボストン校)、さらには日本哲学会の会員から Akiko Frischhut 氏(秋田国際大学)を加えたワークショップを行う。

シデリッツ氏は、氏の自己論に対する様々な批判・反応を踏まえた上で、改めて、現代的「無我」説とも言う「自己のフィクション説」を再論する。また犬飼氏は、「弱い自己」を巡る現代の議論を視野に入れつつ、ヒュームやジェームズの考えを継ぐ新たな自己論の可能性を探る。さらにFrischhut氏は、自己論の中でしばしば語られてきた「真の(ないしは真正の)自己」という概念を批判的に解体する議論を展開する予定である。